グローバル教育における基礎づくりの重要性

―スーパーグローバルハイスクール事業と本校における国語教育との接点―

髙野　慎太郎

一　はじめに

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校（以下、本校）は、平成二十八年度、スーパーグローバルハイスクール（以下、ＳＧＨ）に指定された。その研究開発構想名は「音楽の力で世界を魅了する先導的グローバル・アーティスト育成プロジェクト」である。この構想名の下、音楽の早期専門教育を一九五四（昭和二十九）年の開校当初より緊密な高大連携によって展開してきた本校が、次に掲げる三本柱を中心に世界で活躍する音楽家を育成するためのカリキュラム開発を昨年度より五年間行うことになっており、今年（平成二十九年）度は、その第二年次に相当する。以下、「構想調書」[1]に基づいて本校が進める研究開発の三本柱についてまとめてみる。

1 グローバル・プラクティス（Global Practice）

目標：将来、グローバル・リーダーとして活躍する音楽家において重要となるコア・コンピテンシーである「独創性」を基軸とした「音楽表現力」及び「合奏力」を一層高めていく。

方法：東京藝大の海外一線級アーティストユニット誘致とコラボレーションすることにより世界トップレベルの指導者・音楽家による指導・交流機会の拡充。

i　世界トップレベルの指導者によるレッスンを実施。

ii　学外ステージへの生徒派遣（今年度は九月に第二学年全員を英国に派遣）。

仮説：国内コンクール等への参加・入賞数や国内外ステージ活動数の増加はもとより、著名な国際コンクール等への参加・入賞数の増加へと繋がり、将来、国際舞台の第一線で活躍できる音楽家としての大きな第一歩を踏み出すことができる。

教育課程との関係：

「合奏（三単位×三年間）」「重奏（一単位×三年間）」において、海外一流音楽大学・楽団の指導者・演奏家（邦楽は国内一線級人材）を講師とする指導を導入。

2 グローバル・コミュニケーション（Global Communication）

目標：将来、グローバル・リーダーとして活躍する音楽家において重要となるコア・コンピテンシーである「多様性」を基軸とした「交信力」及び「共感力」を一層高めていく。

方法：音楽家として求められる語学力強化（東京藝術大学言語・音声トレーニングセンターとの連携）、学外ステージでのコラボレーション機会の拡充。

i　習熟度別の少人数クラス編成の実施と、英会話を中心とした語学教育の充実。

ii　ドイツ語やフランス語の選択履修の機会を設定。

iii　学外ステージへの生徒派遣（今年度は九月に第二学年全員を英国に派遣）。

仮説：コミュニケーション能力やコラボレーション能力が強化されるこ

とを通じて、他者との交流に基づく音楽活動実践に必要な能力の涵養が期待され、将来、国内外の一流音楽家とのセッションや聴衆のニーズ等を的確に踏まえた演奏交流が可能となる。

教育課程との関係：

i　「英語表現Ⅰ・Ⅱ（三年間で七単位）」「コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲ（三年間で九単位）」を能力別三クラスに再編・少人数化し、上位クラスは東京藝大の言語・音声トレーニングセンターとの連携により授業を共同化する等、英会話力を強化。

ii　音楽分野で重要な「フランス語」「ドイツ語」の選択履修（高大連携授業）。

iii　「総合学習（二単位）」において海外等学外派遣プログラム「グローバル・コラボレーション」を導入。

3　グローバル・キャリア（Global Career）

目的：グローバル・リーダーとして活躍する音楽家において重要となるコア・コンピテンシーである「主体性」を基軸とした「キャリア・デザイン力」及び「挑戦力」を一層高めていく。

方法：国際舞台への飛躍等、自身の将来をイメージした主体的音楽活動の拡充。

i　学外有識者によるキャリア講座の実施。

ii　東京藝術大学グローバルサポートセンターとの連携、情報共有によるキャリア支援。

仮説：将来を見据えたキャリア・デザイン力が強化され、中長期的な視点から、自身の進むべき道を見極め、自主的に課題を探求し、アグレッシブに挑戦、開拓していくことが期待される。その結果、将来、海外音楽大学への留学や海外ステージへの参加増加が見込まれ、国際舞台を含め幅広く活動する音楽家としての主体的な行動力やモチベーションの向上に繋げることができる。

教育課程との関係：

「総合学習（二単位）」「ホームルーム（三単位）」において学外有識者による「キャリア講座」を導入。

以上から明らかなように、本校のＳＧＨ事業は、教育課程においては、音楽・外国語・特別活動・総合的学習の時間にそれぞれ位置づけられている。したがって、稿者が担当する国語は構想上、ＳＧＨの指定によって授業展開に大きな変化はないと思われていた。しかし、実際ＳＧＨ事業による研究開発が進むにつれ、本校生徒の「グローバル」ということに対する意識に疑問を持つに至った。同時に「グローバル」とは何かという問を なくして、スーパーグローバルハイスクール事業が志向する目的を達成するのは難しいのではないかとと考えた。そこで、本稿では現代文の授業実践を通して、生徒のグローバル意識の変化に関する分析と授業の効果を論じたい。また、本校は音楽高校であり、在籍する生徒のほとんどが将来音楽家になることを目標としている。そこで、グローバル社会と芸術の関係についても考えることを視野に入れる。なお、本稿における分析対象は、稿者が担当する第二学年「現代文Ｂ」の授業である。

二　グローバル人材の要素と本校のＳＧＨ事業

そもそも、ＳＧＨ事業の目的は何か。文部科学省より出されたＳＧＨの実施要項（平成二十六年一月十四日　文部科学大臣決定）には趣旨として次のようにある。

高等学校及び中高一貫教育校（中等教育学校、併設型及び連携型中学校・高等学校）（以下「高等学校等」という。）におけるグローバル・リーダー育成に資する教育を通して、生徒の社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、もって、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図ることとする。

すなわち、「グローバル・リーダーの育成」が、その主たる目的として強調して述べられており、各指定校はそれを意識したさまざまな取り組みを展開している。本校も「音楽の力で世界を魅了する先導的グローバル・アーティスト育成プロジェクト」という構想名が示すとおり、音楽教育を通して「グローバル・リーダー」を育成すべく、開校当初からの緊密な高大連携を十二分に活かしつつ、先に掲げた三本柱を中心に教育活動を進めている。

では、「グローバル・リーダー」とは、どのように定義されるのか。二〇一二

年（平成二十四年）六月四日に政府のグローバル人材育成推進会議によってまとまられた『グローバル人材育成戦略』には「グローバル人材」の概念に包含される要素について次のようにまとめられている。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力
要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

これらを踏まえ、本校のSGH研究開発の三本柱を見てみよう。

1 グローバル・プラクティスは、本校の音楽教育がその中心を担い、「独創性」を基軸とした「音楽表現力」及び「合奏力」の向上を目指す。定期演奏会や室内楽発表会等、校外に向けた成果発表を念頭に置いて集団で取り組むことは、要素Ⅱに挙げられる協調性・柔軟性を育むことにつながり、また生徒それぞれの音楽表現力の伸長は、主体性・積極性、チャレンジ精神の裏付けとなって、結果として国内外のコンクールへの参加・入賞につながっていく。

2 グローバル・コミュニケーションは、「多様性」を基軸とした「交信力」及び「共感力」の向上を目指す。『グローバル人材育成戦略』でも殊に強調されている要素Ⅰの語学力・コミュニケーション能力は、外国語教育がその中心を担うことになるが、グローバル・コミュニケーションは、それにとどまらず、演奏を伴う海外派遣を実施することで、音楽を通じたコミュニケーションを実現する。それが要素Ⅲに挙げられる異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーの確立を促すことになる。

3 グローバル・キャリアは、「主体性」を基軸とした「キャリア・デザイン力」及び「挑戦力」の向上を目指す。具体的には、キャリア講演等の実施によって生徒が自らの現在と第一線で活躍する講師との差異を自覚し、そこに向かっていくまでの手立てを考えることが目的である。それは、要素Ⅱに挙げられている項目と深く結びついて、グローバル社会で活躍する人材としての資質とモチベーションを養うとともに、要素Ⅲにあるような他者と自己の理解が深化する効果が期待できる。

このように、本校のSGHによる研究開発は、グローバル人材として有すべき要素を総合的に育成するプログラム構想となっていることが理解できるであろう。

三　本校生徒の現状

前項においては本校が推進するSGHのプログラムの有効性について述べた。では、そのプログラムの学習者たる本校生徒の現状について述べたい。本校は東京藝術大学音楽学部に附属する音楽高校であり、在籍する生徒は、一学年一学級四十人という少数の入学定員ながら、その一学級の中に作曲・ピアノ・弦楽器・管打楽器・邦楽を専攻実技として学ぶ生徒が混在している。幼少の頃から音楽に触れ、将来音楽家になることを志向している。そのため、特に洋楽（邦楽を除く各専攻）の生徒は、古典音楽の本場であるヨーロッパへの憧れが強く、本校入学以前から海外で開催されるコンクールや講習会に参加している者も少なくない。また、将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合は八割を超えており[2]、世界を見据える意識は全体として高い。では、生徒たちは、どのように「グローバル」ということについて認識しているのか。本稿で取り上げる教材を扱う前に、SGHの「G」、すなわち「グローバル」と聞いて思い浮かぶことは何かと問うてみた。特に字数等を制限せず、思いつくままに答えさせたことによって、さまざまな反応があったが、その回答についてはおおよそ次のように整理できる。

①「世界」という語を含むもの
・世界化
・世界的規模
・世界と繋がること
・世界を一つにしていく
・世界の文化を受け入れる
・世界とのコミュニケーション
・世界の国々が仲良くなること
・世界中で文化的、社会的な交流が行われ、国々の関係が密接になること

②「地球」という語を含むもの
・地球

・地球について、みんなで考えて意識を高めること
・グローバル（global）がglobe（地球）から来ているので、地球全体というイメージ

③「国家」「国境」「国籍」等の枠組みについて言及したもの
・国境を超える現象
・国と国との壁がなくなり、ヒト、モノの動きが活発になること
・国を超えて物事を取り組むこと（考えること）
・国籍を超えたコミュニケーションの広がり
・国家の枠にとらわれずに国際的な活動をすること
・国境・人種を超えて遠くの文化を知れる一方、文化が統一化されて個性が薄れること
・地域や国境を越えて世界が繋がること

④「国際」という語を含むもの
・国際化
・国際的なこと
・international とは少し違うと思うが、何がどう違うかは正直よくわからない
・今まで「自分たちの文化が一番」と自分たちの枠組みに執着していたのが、他の文化との交流を積極的に行うことで、見方を広げ、枠組みを開放し、様々な刺激をしあうことで、より素晴らしい、高尚な文化、文明を育むこと

⑤インターネットと関連付けたもの
・インターネット・ビデオ電話
・インターネットなどの発達に伴って世界中でリアルタイムにコミュニケーションしたり情報を手に入れたりできるようになること
・インターネットなども使って、世界で情報や技術を共有し、社会発展をさせること

⑥外国語・コミュニケーションに関連付けたもの
・英語を喋る
・海外の人とコミュニケーションする

⑦グローバル社会における日本人のあり方への問題について触れたもの
・外国では自己の主張が強いが、それに対して日本人は世間に流されやすい
・最近この言葉がよく聞かれるが、日本人はこれに縛られすぎているのではないか
・自身の自我と呼ばれるものというか、アイデンティティーというか、そういうものが、日本人には足りない

⑧その他
・外国
・多様化
・異文化理解

これらを見てみると、ＳＧＨに指定されたこともあって生徒は「グローバル」という言葉自体は耳にしているが、その言葉の定義や問題の所在については曖昧な部分が多く、適切にグローバル化、グローバル社会ということについて把握している生徒は少ないことが窺える。これは、「グローバル」という言葉のみが先走りしていることを示しており、先にまとめた本校のＳＧＨ事業を推進するにあたっては、グローバル化やグローバル社会というものが何なのかということについて考える機会を持つことの必要性を強く感じさせるものである。伝統的に世界での活躍を志向する生徒が多い本校なればこそ、なおさら急速にグローバル化が進む社会に自らをどう位置づけ、音楽と共にどう生きるかを考えることは重要である。

四　授業実践

前項で述べた生徒の現状を踏まえ、「現代文Ｂ」において「グローバル」をキーワードにした授業を実践した。本校が採択する「現代文Ｂ」の教科書は数研出版発行のものである。今回はその第一章にある上田紀行の「「内的成長」社会へ」[3]を教材として第二学年で扱った。教科書採用部分は以下のような内容である。

「中間社会」が崩壊して、グローバリズムとナショナリズム・宗教的原理主義が同時に進展する中、多様な「生きる意味」の捨象が起こっている。

「内的成長」をもたらすコミュニティーの再創造が今こそ求められる。[4]

ここでいう「内的成長」とは、他者の「生きる意味」への内的感受性を育てることであるが、本教材を用いた最大の理由は、グローバル化がもたらす問題について触れられている点にある。先の生徒の現状にも見られるが、生徒の多くは、グローバル化の進行によって「世界の国々が仲良くなる」「刺激しあうことで、より素晴らしい、高尚な文化、文明を育む」と考えており、グローバル化を絶対的に良いこととして捉えている。さらに、本校がSGHの指定を受けたことも相まって、より主観的にグローバル化を肯定する意識を高めたと考えられる。それを本教材によって一度リセットし、改めてグローバル化を相対化し、その問題点にまで視野を広げていく意味は大きい。また、グローバリズムと表裏の関係にあるナショナリズムや宗教的原理主義については、「アメリカ・ファースト」を打ち出すトランプ政権の誕生や世界各地で起こる宗教的原理主義者によるテロ事件等、具体的かつ時事的な事柄とも関連付けることで、文章の読みを深めることができよう。

実践①

『教授資料』にある「授業の展開例」では、本教材を三～五時間での活用を想定しており、三つある意味段落をそれぞれ音読させ、内容を確認し、まとめるという流れを提示している。それは、順を追ってそれぞれの段落を理解し、全体像を把握するという意図に基づいていると考えられるが、数時間をかけて同じ教材を扱う場合、部分と部分のつながりを意識しづらくなる傾向にある。よって、部分を積み上げて全体を把握する流れよりも、まずは全体の大枠を把握し、全体との関係を常に意識しながら部分の理解を進め、全体の理解を深める方法が有効と考える。そこで、本文全体のキーワードやテーマに関する学習をあらかじめ行う必要性がある。このような語句に関する指導については、学習指導要領にも次のように示されている。

読むことの学習の中では、自分のそれまで知らなかった言葉に関心をもたせ、それを話すことや書くことの学習において積極的に使うよう指導する必要がある。その際、日常あまり用いないが、理解し、思考し、表現するためには欠かせない語や、学習を進める上で必要な語について意識的に取り上げることが大切である。[5]

この考え方に基づき、まず本文を通読する前に「グローバル」という言葉が、どのような意味を持つのかを把握させたい。ちなみに、日本で最大規模の国語辞典である『日本国語大辞典』[6]の「グローバル」の項には「地球的な規模であるさま。全世界にわたるさま。世界的。」とあるだけで、「グローバリゼーション（グローバル化）」や「グローバリズム」の立項はない。ちなみに本校の生徒が語句を調べる際に使用する電子辞書に収録されている主な辞書としては『広辞苑』があるが、それにも「グローバル」は『日本国語大辞典』と同様の解説がなされているのみである。ただし、「グローバリゼーション」「グローバリズム」については立項されており、次のように解説されている。

「グローバリゼーション」
国を超えて地球規模で交流や通商が拡大すること。世界全体にわたるようになること。

「グローバリズム」
国を超えて地球全体を一体としてとらえる考え方や主義。

これを読むだけでは、グローバル化というものが、いかなる社会現象であるのかは把握しづらいであろう。そこで、副教材として使用している『現代文 キーワード読解』[7]の「グローバル化（グローバリゼーション）」の解説に目を向ける。すると次のようにある。

国際化という傾向はあくまで「国家」を中心としているが、グローバル化は国家や国境に関係なく、物事が地球規模で展開することを言う。ヒト・モノ・カネ・情報などが国境に関係なく（ボーダーレスに）行き交う現代では、グローバル化はますます進展していくことが予想される。
問題点としてはグローバル化によって力の論理がむき出しになり、弱い文化を押しつぶすような標準化が進み、弱肉強食の世界になってしまうことなどが挙げられる。
なお、グローバル化を推進すべきだという考えを「グローバリズム」という。

この説明は、本教材の導入として内容理解の補助となるものであるが、グローバル化の利点のみを認識していた本校の多くの生徒にとって、当初考えていた

「グローバル」の意味からすると意外な要素も含まれている。その気づきが、本教材による学習の動機付けにもなる。生徒に限らず、現代人は情報化が進展する中で、無意識のうちに多種多様な言語に触れている。よく耳にする言葉であっても、いざその意味内容を問われると、意外にもその本質を理解していないことがある。よって、文章の内容、特に評論などは、キーワードとなる語句の意味や文章に関わるテーマの論点についてあらかじめ把握することが、深い理解の土台になると考えるのである。

実践②

昨今、アクティブ・ラーニングに関する議論が活発に行われており、さまざまな実践研究が蓄積されている。アクティブ・ラーニングの意義等は、ここで改めて論ずるまでもないが、習得した知識を知っているだけに止めるのではなく、実社会・実生活に関連付けて活用するに至るまでの力を育成することが求められている。本教材もその観点で活用しようとするならば、グローバル社会の現状を知識として習得し、自らの「生」との関わりを考え、それを言語によって表現することが想定される。本校は、音楽高校であり、生徒のほとんどが将来音楽家になることを志向している。すなわち、本校生徒の実生活の中で、音楽が占める割合は相当なものであり、音楽こそ我が人生とまで考える生徒も少なくない。よって、本教材の読解を基に、音楽との関わりを意識しながらグローバル化という不可避な社会現象とどう対峙するかということについて考えることは、アクティブ・ラーニングの趣旨に適うものと考える。

そこで、どのような問いを立てるのかが問題になる。アクティブ・ラーニングにおける発問は、「アクティブ・ラーニングの神髄」[8]とも言われており、生徒の思考を引き出す重要な要素である。本教材によってグローバル社会というものが、どのうなもので、どのような問題をはらんでいるかを学び、さらに実生活との関連性を視野に入れるとなると、本校生徒の場合は、必然的に音楽との関わりを考えることになる。よって、本教材による学習のまとめとして、「グローバル社会における芸術の可能性について考えよう」という問いを立てた。やや抽象的ではあるが、あまり具体的な問にすると、思考に窮することも考えられるため、幅のある問を設定した。以下に生徒による記述の一部を掲げる。

A　グローバル社会においての芸術は、意思の伝達手段としては平等なものであり、自分の世界観が強く、誰にも立ち入ることのできないものであればあるほど更に神秘的な域にまで達することができると考える。

B　芸術は、個人の独創性の表現を行うことなくしては成り立たないので、機械的なグローバル化は意味をなさない。よって、グローバル化と言っても互いの思想を尊重し合い、互いの意見が対立したり、融和することによって、より素晴らしい世界を創っていけるようなグローバル意識を身につけたい。

C　グローバル化というある種の均質化に対し、芸術というものは不変の価値を持っていると思う。そういう意味では、グローバル社会において芸術の可能性は大きいかもしれない。

D　現在、世界には「閉ざされていた」からこそできたといえる芸術が多くある。しかし、「グローバリズムが芸術の画一化を招く」との声がある。しかし、私は「NO」と言いたい。なぜなら、「芸術」とは、相互に刺激し合うからこそ発展していくものもある。ゴッホの作品にも日本の浮世絵に刺激されて生まれたものもある。伝統と発展は対立するものではない。発展があるからこそ、伝統が続くのである。もし伝統に何も変化を加えなければ、それは「芸術を守る」のではなく、「芸術を停滞させる」ことに他ならない。だからこそ相互に刺激し合うことが必要である。

E　「世界の同化」という意味合いにおいて、芸術はグローバル社会の中で大きな役割を果たすことができるだろう。芸術に言語や民族の差異は関係ない。各々が自らの感性のままに発信し、また受け取ることができるものだ。そうした中で、個人の考え方や文化、民族性の違いは新たな解釈を生む可能性にもなる。

F　各々の芸術に対する解釈や意見は均質化せずに、さまざまな考えが共存できるようなグローバル社会を目指すべきだと考える。

当然のことながら、高校生のレベルでの思考なので、拙ない部分もあるが、本教材の学習以前に「グローバル」と聞いて思い浮かぶことは何かという問に対する回答と比べると、グローバル化に対する考えは格段に深化しており、生徒自身が芸術（音楽）を通して世界と対峙する姿勢が読み取れる。言い換えれば、

グローバル化という社会の現状の把握から、本校生徒の「生きる意味」とも言える芸術を通して、自己が直面する課題の発見に至ったとも言える。

それは、本教材と連続して中島敦の『山月記』を学習した影響もあると考える。『山月記』は、高等学校における現代文の定番教材として長年親しまれているが、詩人として名声を得ようとした李徴が、望み叶わず発狂し、虎となる物語である。この李徴の存在は、音楽家を志す生徒にとって、芸術に（もしくは芸術で）生きるということを切実に考えさせられるものである。それは生徒による『山月記』の主題把握からも読み取れる。

a　「芸術」にかける思いの大きさと、自分自身の身の程、精神的器量の矛盾。それが芸術を向上させていくこともあれば、李徴のように自分を破滅させてしまう場合もある。

b　芸術に生きることには、壁が存在する。自らの才能を信じながらも、他者と比較されることへの恐怖、さらには何のために芸術を志すかという葛藤も生まれる。

c　芸術至上主義の象徴とも言える李徴の描写は、芸術が他の社会機能と関わらず、芸術だけを価値として見る芸術至上主義の破綻を意味している。

ここに示したのはほんの一部ではあるが、生徒の大半は、このように芸術の世界で生きることの難しさを『山月記』から読み取っており、李徴の生き方は、生徒自身の生き方への問題提起となっている。また、李徴の描写を通して自己を客観視することにもなっている。そして、「「内的成長」社会へ」と連続して学習することで、グローバル社会において音楽家として生きるということにまで思考を深めることが可能となった。

五　まとめ

ここまで「現代文B」における評論の一教材による実践の一部を報告したが、本校のSGHの構想の柱に国語科の領域が関連する内容はなかった。しかし、SGHの研究開発を推進する中で、生徒のグローバル社会に関する認識を改めて問うと非常に薄く曖昧であることに気が付いた。それに対して何らかの学習機会の必要性を感じたことが本稿で触れた実践に至るきっかけである。しかし、国語科の目標は、

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。[9]

ということであり、あくまでも言語能力の育成が国語科の中心である。すなわち、グローバリズムやグローバリゼーションという社会現象に関する内容そのものを扱うことは、国語教育の本質からは外れている。むしろ、高等学校の必修科目でもある「現代社会」で学ぶべき項目であるが、本校の教育課程において「現代社会」は第三学年での履修となっている。効果的にSGH事業を推進すべく、早い段階で「グローバル社会とは何か」を知る機会を設けるために、教育課程の見直しを含めて検討する必要もあるが、現行の教育課程で考えるならば、第一学年の「国語総合」で本実践と同様の実践をすべきではないかと考える。また、「国語総合」の内容に含まれる言語活動の充実にもつなげていくことで、「グローバル」をキーワードとして、生徒の言語に関する能力の伸長が図れると共に、SGH事業を推進する上での基礎的な知識も身につけることが可能となろう。

髙木まさきは、グローバル社会で求められる国語力について、「他者との関係性を土台として社会と自らへの問い直しを必須としている」とし、そのためには、

対象認識を支える豊かな語彙、言葉と対象・言葉と言葉の関係などを吟味する力、さらには他者への想像力などが不可欠だ。こうした力こそが、グローバル社会において、ただ高度なだけでなく、真に必要な「思考力・判断力・表現力」の土台となるのではないだろうか。[10]

と述べている。本校生徒の場合「グローバル」という言葉のみが一人歩きし、その意味内容の認識が薄かった。それは語彙力の問題であるが、グローバル社会がいかなるもので、いかなる問題を孕んでいるのか、それをまず理解することがグローバル教育の入口になくてはならず、その知識の習得が支えとなってさまざまな学習活動の効果的な展開へとつながっていくと考える。本校のSGH事業の構想においては、先にも述べたように、教科としては音楽と外国語がその中心であるが、グローバル・リーダーの育成のために国語教育が果たす役

割は決して小さくはない。むしろ、本校のＳＧＨ事業の根底を支える教科として、今後も接点を見いだしつつ、教育活動を進めていきたい。

注

(1) 本校のＳＧＨ事業の構想調書は、スーパグローバルハイスクールウェブサイト（http://www.sghc.jp/）に公開されている。

(2) 「平成二十八年度スーパーグローバルハイスクール　目標設定シート」（『平成二十八年度（第一年次）ＳＧＨ研究開発実施報告書』東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校／二〇一七年三月）

(3) 本教材の出典は『生きる意味』（岩波新書／二〇〇五年一月）である。

(4) 『現代文Ｂ　教授資料１』（数研出版）

(5) 『高等学校学習指導要領　国語編』（文部科学省／二〇一〇年六月）

(6) 『日本国語大辞典』第二版（小学館／二〇〇〇年十二月～二〇〇二年十二月）

(7) 『現代文 キーワード読解』改訂版（Ｚ会出版／二〇一六年二月）

(8) 高木展郎・大滝一登『アクティブ・ラーニングを取り入れた授業づくり――高校国語の授業改革』（明治書院／二〇一七年一月）

(9) 注(5)に同じ。

(10) 高木まさき「グローバル社会で求められる国語の力」（『月刊国語教育研究』五二一号／二〇一五年九月）